城島散策マップ

城島地区地域活動推進会議

春の渋田川河畔（大島・下島）

遠い昔に思いを馳せて

古代、城島は城所の丘陵地を除いて海であり、点在する島を小鍋島、大島、下島と呼んでいました。大島は、大きな島の意ではなく、「あふしま」が転じたもので、「あふ」とは太陽のことを云いました。島影のどの辺りから日が昇るかで季節を判断する目安にする島が「あふしま」です。城所山の真東に大島があります。城島は近在に季節を知らせる大きな自然の暦になっていたと考えられます。

また、中世にはその名残として城島一体は島ヶ原と呼ばれていました。室町時代中頃、鎌倉公方足利持氏と関東管領上杉氏との間に争いが起こりました。享徳の乱です。この時、島ヶ原で後詰（援軍）を待っていた上杉方に公方方が急襲をかけ、上杉方は総崩れとなり敗走しました。これを島ヶ原の戦いと云います。城島は古戦場でもありました。

城島地区にもこのようなあまり知られていない歴史があります。たまには身近な近隣の花や山を愛でながら、先人たちが歩んだ遥か昔に思いを馳せる散策も楽しいことではないでしょうか。その際は是非このマップをご活用ください。

発　行　者	城島地区地域活動推進会議
編集責任者	三嶽 嘉保
写真提供者	大貫　毅、遠藤一政、清田一美、松井孝城
印刷・製作	株式会社シーエム
発　行　日	令和３年３月

①城所観音堂

浄心寺入口右手にあるお堂は、鎌倉幕府の歴史書『東鑑』にある、源頼朝の妻、政子の安産祈願がなされた相模国十五寺社のひとつ、真言宗の古刹、常蘇寺の観音堂です。もとは城所山山頂の南西面にありましたが、昭和30年代に新幹線工事に土を提供した削平工事の際、浄心寺境内の現在地へ移築されました。江戸期には山上の境内に観音堂を始め、薬師堂、鐘楼、仁王門等七堂伽藍が立ち並び、相模国第三十二番札所になっていました。その御詠歌は、

きどころの　このま隠れの観世音　祈りて常に　さむるうつし世

しかし、残念なことに1875年（明治8年）8月21日夜半の火災で悉く灰燼に帰してしまいました。その焼け跡の地中から甕に入った金仏が発見され、甕の周囲には一石に一文字ずつ経を記した石が敷き詰められていたと、当時評判になりました。この時焼失したご本尊の千手観音立像は、745年（天平17年）、行基作と伝わり、その胎内に「1213年（健保元年）荒木五郎守宗、重宗らが堂を建立した」との文書があったと云われています。現在のご本尊の千手観音立像は江戸期の作ですが秘仏とされ、12年にいちど、子の年の8月17日に開帳されます。観音堂前の石仏群は、嘗ての山上の境内より移設されたものです。中でも1823年（文政6年）造立の輪廻塔（後生車）は、市内では唯一のものです。

②城所貴船神社（城所の鎮守）

城所はもと、「木所」であったと言われています。古代、城所山一帯には大木が生い茂り、直ぐ真際まで海が迫っていました。そのような場所は刳舟（丸木舟）を造るのに最適な場所でした。ここで舟づくりが行われていたと考えられます。その舟づくり集団の氏神が貴船神社です。従ってその創建は古く、遥か応神朝あたりと考えられます。祭神は闇龗神（水の神様）です。城所貴船神社は、鎮守としては神奈川県で唯一の貴船神社（京都貴船神社系）です。

三面大荒神社（哭き荒神）

荒神は火伏の神で、火を使う蹈鞴製鉄や鍛冶が盛んだった中国地方に多くの荒神社が祀られています。一方、刳船を作るにも火が必要でした。裂いた木の上に焼石を乗せ、焦げ跡を削って中を刳り抜く作業をしたからです。貴船の舟づくり集団も火事を恐れ荒神を祀りました。各地の貴船神社の近くに荒神社が祀られているのはその為です。

1192年（建久3年）、源頼朝は妻、政子の安産祈願のため、相模国の主だった神社仏閣に神馬を奉納しました。この地にあった常蘇寺観音堂にも神馬が奉納されました。しかし、生まれた子の夜泣きが止まなかった為、観音堂境内に祀られていたこの荒神さまに祈願したところ、夜泣きがぴたりと止んだと伝えられています。以来、この荒神を哭き荒神と呼び、安産子安の神として崇められてきました。

城所御嶽神社

大和政権が成立して間もない景行天皇の御代、その皇子であった倭建命による東征が行われました。その目的は、政権に纏わなかった肥人が創った日高見国を成敗することでした。当時、関東各地に日高見国があったと伝わります。倭建命の東征の主たる敵は、大山山麓を本拠地とし、国造となり関東各地の日高見国の盟主的存在となっていた相模国造を亡ぼすことでした。無事目的を果たした倭建命は東征の帰路、伊吹山で賊に襲われ深手を負い、遂に都への帰還は叶いませんでした。命の魂は白鳥と生り、都の空を名残惜しそうに幾度となく旋回したのち、大阪湾へ飛び去ったと云われています。所謂、白鳥伝説です。関東各地で命と共に戦った人々は、このことを知り命を偲び、神社を建て命の冥福を祈りました。それが御嶽神社です。この神社が城所にあるということは、倭建命が相模国造との戦いの折、この地に来られたことを物語っています。

戦勝祈願の臥牛

境内にある臥牛像は、明治37年日露戦争の戦勝祈願として、嘗て城所山山上にあった観音堂境内の哭き荒神の脇に奉納されたものです。古来より、戦勝祈願の仏は大威徳明王とされ、六面六臂六足の異形のお姿で牛にまたがっておられます。それ故、戦勝祈願として牛を奉納したと考えられます。この像に纏わる次のような逸話が伝わっています。

大正12年の関東大震災で臥牛が崖下の堂坂に落下し行方不明になりました。翌年、村中に赤痢が流行し、悪いことが続くので霊媒師の「おきぬさん」に堂坂に行って探してもらうことにしました。「おきぬさん」が杖で地面をトントンと叩き、「ここじゃな！」と云われた箇所を掘ると、見事、臥牛が発見されました。元の場所に臥牛を納めたところ、赤痢はピタリと終息しました。

③浄心寺（曹洞宗）

浄心寺は室町時代の1528年（享禄元年）、下吉沢の松岩寺の月松宗尖和尚により開山されました。現在の本堂は1864年（元治元年）の建立で、以来ほぼ160年の風雪に耐えてきました。設計は高名な大山の宮大工、手中明王太郎景元の手によるものです。

子育て地蔵

浄心寺山門前、右手に子育て地蔵があります。その台座部分に「石工 信州住人/幸蔵作」とあります。この地蔵は江戸期、その作品がブランド品として持て囃された信州高遠の石工の手によるものです。ほかに城所には高遠の石工の作品があと二つあります。貴船神社境内右手にある九十三翁碑台座部分の舗石蹈段献納碑に「信州高遠/黒澤邨/石工 藤原幸蔵」とあり、貴船神社の踏み石と石段もこの子育て地蔵を作った者と同一人物が作りました。また、浄心寺境内にある宝篋印塔には「石工/信州伊那郡/北原村/北原與兵衛」とあり、高遠の石工の作品だったことが分かります。残念ながらこの宝篋印塔は風化が進んで危険なため建て替えられましたが、刻まれた文字はそのまま複刻されています。

城所氏の板碑

左大臣藤原冬嗣の末裔、伊勢原の糟屋氏の一族が城所氏を名乗り、城所に居を構えたと云われています。居を構えたのは現在の浄心寺の境内で、北側の城所山に城所城を築きました。鎌倉時代末期、足利尊氏上洛の折、城所藤五郎正揚は尊氏に従い上洛、その後、南北朝の戦いで各地を転戦しました。その間、石見の三角入道謀反の際、武功を上げたことが『太平記』の記述にあります。藤五郎が引退して故郷城所に帰還したのは、おそらく観応の擾乱が終結した頃と思われます。浄心寺境内から1314年（正和3年）と1352年頃（文和年間）の板碑が3枚出土しました。観応の擾乱が終結したのが1352年3月なので、藤五郎は帰還して程なく祖父母あるいは父母の供養の為、板碑を建立したことが分かります。

④下島八幡神社（下島の鎮守）

下島八幡神社の社殿内に勾欄付きの立派な宮があります。これは徳川家康が奉納したものです。家康は中原御殿を宿泊場所とし、たびたび鷹狩を催されました。この地に来られた際、家康の鷹が八幡神社境内の松の木の枝に挟まり、動けなくなってしまいました。そこで家康がこの神社に起請されると、たちまちに鷹は松の木から脱出し、家康の手元に戻りました。お喜びになった家康はこの神社に社領を寄進し、宮を奉納されたと云われています。近くの渋田川に架かる橋を鷹匠橋と云うのはこの故事に由来します。

⑤霊山寺（浄土宗）

岩船地蔵

霊山寺境内入口に「岩船地蔵念仏供養」と台座に書かれた地蔵像があります。岩船地蔵は栃木市岩舟町の高勝寺のご本尊で、近くにある岩船山は古代に遡る霊場です。3代将軍徳川家光の側室、宝樹院は岩船地蔵への信仰が篤かったと云われています。宝樹院の子の4代将軍家綱は「岩船地蔵の申し子」と言われました。以後、将軍家の庇護篤く、八代将軍吉宗の時代、一時期、関東近在で多くの岩船地蔵が作られました。この地蔵もその時代に作られたものです。

淡島神社

神功皇后が三韓征伐の帰途、瀬戸内海で嵐に会い、紀伊半島と淡路島の間の小島に漂着し、そこに祀られていた少彦名命と大己貴命に助けられ、無事摂津に上陸することが出来ました。その後、孫の仁徳天皇が友ヶ島へ立ち寄られた際にその逸話をお聞きになり、対岸の加太に創建されたのが淡島神社の由来です。下島の淡島神社がいつ頃、どのような経緯で創建されたかは不明ですが、昭和30年代頃までは縁日の日を「あわしままち」と称し、大勢の参拝者で賑わい、近在では有名な神社でした。安産、婦人病に霊験あらたかと伝わっています。また裁縫の上達を願う針供養も行われています。社殿前の「百度石」は市内唯一のものです。

⑥正福寺（臨済宗）

二猿庚申塔

庚申講は古くから上層階級の間で行われてきましたが、江戸期に入り社会が安定すると急速に一般庶民の間に広まりました。なかでも相模国は、庚申講が全国的に見ても早くから一般庶民に広まった地域と見られます。特に二猿塔や三猿塔といった猿を配した庚申塔は藤沢、茅ヶ崎、平塚、伊勢原、秦野といった地区に最初に現れました。1656年（明暦2年）紀銘の正福寺の二猿塔は、平塚市内では最も古く、県指定有形民俗文化財に指定されています。

薬師如来像と十二神将像

境内の薬師堂の薬師如来像と十二神将像は市指定文化財になっています。

⑦小鍋島八幡神社（小鍋島の鎮守）、日枝神社

小鍋島では八幡神社の他に、長島地区で弁天様、城東地区で山王様を祀っていましたが、大正時代中頃、この二社を八幡神社に合祀することにしました。神様の御魂を見てはいけないとのことで、近隣より小さな神輿を借りてきて、真夜中に神の御魂を乗せ、神主立会いのもと、手探りで合祀を行ったそうです。しかし、その後、城東地区で戸主の人が立て続けに亡くなることがあり、これは「山王様の祟りじゃ！」と云うことになり、山王様をまた分祀することにしたと伝わっています。現在でも城東地区では日枝神社（山王社）を別に祀っています。

城島散策マップ

城島地区地域活動推進会議

城所山よりの富士・大山

城島地区大木調査

No.	地区	種類	所在地	胴回り(cm)
❶	小鍋島	ケヤキ	磯村明良宅	390
❷	城所	エノキ	城所山東斜面	375
❸	城所	ケヤキ	城所一本松	315
❹	城所	エノキ	城所山東斜面	296
❺	大島	クスノキ	大島八幡神社	295
❻	大島	ケヤキ	ゲートボール場	288
❼	小鍋島	タブノキ	小鍋島八幡神社	286
❽	小鍋島	クスノキ	小鍋島八幡神社	285
❾	大島	ケヤキ	ゲートボール場	278
❿	城所	タブノキ	諏訪神社	268

❶馬頭観音

六差路の脇の地蔵像の上に、馬頭観音が二段重ねで祀られています。その脇に馬頭観音と彫られた土管があります。これは終戦直後、飼っていた馬を軍に供出した村人が馬の供養の為、資材の無いなか苦心して土管を使って祀ったものです。

❺大住中学校生徒の壁画

❸城所の里を育てる会

城所地区では地元有志で「里を育てる会」を結成し、以下のような活動を行っています。

- 荒廃地を活用しそばや綿などを栽培しています。年末には、子ども達も参加して、収穫したそばを使ったそば打ち体験教室をひらいています。
- 城所大排水路の土手にヒガンバナやスイセンを植え、花見会を行っています。
- 城所下地区で現在も行われている地蔵講や、大山講、だんご焼きなどの伝統行事を支援しています。

❸そば畑

❸ヒガンバナ

❿花の里城島

城所山、ハゼノキの紅葉

❷神楽石

興淵寺（1501年開創）の開祖、円光尼がある夜、夢に現れた白衣の神に石を掘り出すよう告げられました。その場所を掘ったところ出てきたのがこの石だと伝わります。円光尼は終生この石を大切にしたと云われています。

❾湘南ライスセンター

城島地区は神奈川県でも有数の穀倉地帯です。しかし、近年農業の担い手不足により荒廃田が目立つようになりました。湘南ライスセンターは、水稲作業の受託による水田を核とした地域農業の活性化、地域農業の担い手育成と農業経営安定化のため、地元有志により平成19年に設立されました。

❾湘南ライスセンター

❻清田佐兵衛の墓

清田佐兵衛は、裸一貫で20歳の時、郷土大島を出て浅野セメント石炭部の人夫より身を興し、一代にして石炭業の事業家となりました。

❶城島一の大木・古木

❼宗真寺

宗真寺境内にある宝篋印塔（基礎部分）は応永6年（1399年）の紀銘があり、市内最古のものです。

大島からの富士

⇒荒廃地活用地

❹モクレン

城島小学校の通学路

①～⑦の赤文字の神社仏閣は、裏面に説明があります。

❿花のふれあいスポット

花壇

城島地区では、各所で遊休地を活用した花壇づくりが行われています。下島地区では「花のふれあいスポット」として、地元の方が花壇づくりに取り組んでいます。また、城島地区地域活動推進会議でも各所で花壇づくりを行っています。

⓬花の里城島

❽地蔵堂

地蔵堂はもと、地蔵院と称し興淵寺の末寺でした。現在は、そのご本尊だった地蔵菩薩が祀られています。

渋田川河畔からの富士

渋田川の桜並木